令和七年度　お茶の水女子大学　文教育学部　人間社会科学科　小論文（後期日程）試験問題

以下の文章は、アスリートとしても実績を残してきた著者が、熟達について論じた著書の一部です。著者はなぜ熟達を「人間にしかできないこと」として捉えているか、を簡潔にまとめたうえで、あなたは「人間にしかできないこと」についてどのように考えるか、あなたの考えを一〇〇〇字以内で述べなさい。

昨今、人間の能力に関して知見が蓄積されていく中で、努力の価値が疑われつつある。人間の行先は遺伝子と環境要因によって決まっているという意見もあり、そうであれば努力は意味をなさない。

人間についての謎が解明されるにつれ、人間の可能性を信じることが難しくなった。可能性とは、別の言い方をすれば、振れ幅のことである。「可能性がある」とは「未来はどうなるかわからない」ということだ。だからあらゆることがはっきりするならば可能性はなくなっていく。

また人間の卓越した技能を機械が再現できないことが、人間の神秘性を支える一つの理由だったが、少しずつ人間の技能が勝てる領域は小さくなってきた。実際に、複雑性が高いため、当面は人間を超えるのは難しいだろうと言われた囲碁の世界でも人工知能に人間が敗れた。身体操作は複雑だから、歩行ひとつとっても機械は満足にできないと言われていたが、自由に走る四足ロボットが登場し、二足走行も数年前と比べかなりスムーズになっている。身体操作の領域でもいずれ追い越されるのだろう。

ひとつの技能を極めていくことは、目的とされるものに最適化することでもある。例えば仕事とは何かの機能を果たすことであり、良い仕事をするには仕事の役割に自らを最適化することが求められる。ネジを締める時に、ドライバーを使うのが最も効率が良いように、いつも安定して質の高いパフォーマンスが発揮できることが良いこととされてきた。だが、その最適化だけを求める技能は機械にとって換わられつつある。

どの分野でも問われ始めたのは、人間にしかできないことは何か、だ。合理性を追求してきたのは私たち自身なので皮肉ではあるが、機械にやらせるのが最も合理的であるとしたら人間は何をやるべきなのだろうか。新しい技術に対して投げかけられる「何の役に立つのか」という問いはこちらに投げ返された。人間の存在意義とはなんだろうか、という問いだ。

私は熟達こそが「人間にしかできないこと」を理解する鍵になると考えている。機械と人間の最大の違いは「主観的体験」の有無だ。私たちは身体を通じて外界を知覚し、それを元に考え行動している。思考し行動する部分はいずれ機械が行えるようになるかもしれないが、知覚は身体なしでは行えない。本書では身体の例を多用している。私自身のバックグラウンドがアスリートであることも影響しているが、人間と機械を分ける決定的な差だと考えるからでもある。自分の身体で外界と内部の変化も感じ取り、試行錯誤しながら上達し、上達している自分を内観する。この一連のプロセスから得る「主観的体験」こそが人間にしかできないことではないか。

熟達していく過程で、私たちは夢中という状態に入る。この状態では外界の感じ取り方も変容し、リアリティが一層高まる。熟達のプロセスで遭遇する夢中の瞬間こそが人間の生きる実感の中心だと私は考えている。それは他ならぬ「私」を通して、世界を感じていくプロセスでもある。考える私より、感じて動く私に「人間にしかできないこと」が潜んでいるのではないか。

【出典】為末大『熟達論　人はいつまでも学び、成長できる』新潮社、二〇二三年、三三―三五頁。